

橋下「維新」許さない

労組事務所めぐるたたかい

中

分断し、弱いところから切り捨てる攻撃に反対し、住民とともに運動し大きな役割を発揮してきました。市

職員に向けられた「思想調査アンケート」にも毅然、労組の看板を見つけ、「ドア（きぜん）とたかいましをたいたいこともありますた」。

この4月には、公立保育所の保育士と幼稚園教員の給料を民間に「合わせ」て、民営化しやすくすることがねらわれました。公立保育園や幼稚園をなくさないでという保護者の願いと、専門性を認めてほしい」「いい保育や教育がしたい」「そのために身分を保障してほしい」という保育士や教員の思いを重ねた運動を繰り広げました。

団結のとりでに

一方で心身を病む市職員が後を絶たず、家族の心配も募ります。市職員の母親が相談先を探して市庁舎内をあてもなくぐるぐるとめ

市民の運動と結び

大阪市役所労働組合（市労組）と市労働組合総連合（市労組連）は、橋下徹市長による一方的な事務所退去命令に応じませんでし
た。「おかしいじゃないか」「まだおるのか」と市民から電話がかかってきたこともあります。逆に、「残つてがんばってほしい」「励みになる」と激励の声も寄せられています。

地下鉄・市バスの敬老バス有料化、住吉市民病院の紹介する案内板から事務所廃止、新婚家庭の家賃補助の名前が消されてしましました。事務所があるのは市

庁舎の地下1階。ウナギの寝床のような44平方㍍の一室。入り口には「大阪市労働組合総連合 大阪市役所労働組合」と書かれた看板

がありました。「これがあることが大事なんです」と見つめるのは、市労組の竹村博子副委員長です。

市労組は、市民や市職員に向けられた橋下市長の「恐怖政治」と真正面からたたかってきました。

竹村副委員長はいいました。「市職員が安心して働く環境を民間企業による激しい組合攻撃とたたかい、組合を守ってきた歴史があります。電気やガスも切られて冬の寒さや真夏の酷暑にさらされても、パワーショベルでつぶされそうになつても、労働者のとりでを決して明け渡すまいとたたかいました。

大阪労連は2012年2月、「労働者の権利侵害とたたかう闘争本部」を設置。公務・民間・地域が一

体となって、橋下市長と維新の会による権利侵害を許さないたたかいをすすめました。市職員を励まそうと毎月、全区役所前での宣伝を実施。10月には46回を数えています。

（つづく）

大阪労連の菅義人事務局長は「労働組合にとって、組合事務所は団結のとりで」と強調します。

（つづく）